

すいれんは咲いたが

小川未明

青空文庫

金魚鉢きんぎよばちにいれてあるすいれんが、かわいらしい黄色きいろな花はなを開ひらきました。どこから飛とんできたか小ちいさなはちがみつを吸すっています。勇ゆうちやんは日ひ当あたりに出でて、花はなと水みずの上うへに映うつつた雲影くもかげをじつとながめながら、

「木田きだくんは、どうしたろうな。」と、思おもいました。

二人ふたりは、同おなじ組くみでいっしょにデッドボールをやれば、まりほうりをして遊あそんだものです。木田きだは、小ちいさくなつたズボンをはいていたもので、うずくまるとおしりが割われて、さるのおしりのように見みえたのも目めにうつてきました。

ある日ひのこと雑誌ざっしを貸かしてやると、

「ふなをあげるから遊あそびにこない？」と、木田きだはいいました。

勇ゆうちやんは、ふながほしかつたから、急きゆうにゆきたくなりました。

「どうしたの、君きみが釣つつてきたのかい。」とたずねました。木田きだは、棒切ぼうきれで砂すなの上うへに字じをかきながら、

「ああ、お父とうさんと川かわへいつて釣つつてきたんだ。こんど、君きみもいっしょにゆかない？」と、いきいきとした顔かおを上げただけであります。

「いつか、つれていっておくれよ。君のお父さん、釣るのはうまい？」

「なにうまいもんか、いつも僕のほうがたくさん釣るのさ。ふなをあげるから、遊びにこない。」と、木田はすすめたのでした。

「いこうか、じゃ、うちへ帰ったら、かばんを置いてすぐにね。」

遊びにゆく約束をしたので勇ちゃんは、その日、木田から教わった道を歩いてたずねてゆきました。すると坂の下的小さなみすばらしい床屋がありました。

「この床屋かしらん。」と、勇ちゃんは思ったが、まさかこんな汚らしい家ではあるまいというような気もして、その前までいってみると、木田の姿が、すぐ目にはいったのです。

「勇ちゃん、裏の方へおまわりよ。」

木田は、喜んでたずねてきてくれた友だちを迎えました。みかん箱を持ってきて、中からいろいろのものを出して拵げました。珍しい貝がらもあれば、金光りのする石もあり、また釣りの道具もまじっていれば、形の変わったべいごまもはいていました。

「こんど釣りにゆくとき、さおがなかったなら、僕のお父さんに造ってもらうといいぜ。」と、木田はいいました。木田は、なんでもお父さんというのです。それで、勇ちゃんが、「君のお母さんは？」と、きくと、木田は、急にさびしそうな顔つきをして、

「僕のお母さんは、なくなつたのだ。お父さんと二人きりなんだよ。だけど、さびしいこともないや。」と、口だけでは、元氣にいいました。木田くんのお父さんは、木田によく似ていました。脊が低くて、丸顔でした。白い仕事服を着て、お客の頭を刈っていました。それが終わつたとみえて、二人の遊んでゐるへやへ塩せんべいの盆と、お茶のはいつた土びんと持つてきて、

「よくいらつしやいました。」と、置いてゆかれたのでした。

勇ちゃんは、歸りに、ふなを三匹もらつて、ブリキかんの中へ入れて下げながら、お母さんのない木田くんのことを考えつつ歩いてきました。

「しかし、やさしい、いいお父さんだな。」と思うと、なぜかしらずに熱い涙が目の中にわいてきました。

その後学校では、二人はいつとう仲よくなりました。

ある日のこと、勇ちゃんのお母さんは、だいぶ髪の毛の伸びた勇ちゃんの頭を見て、

「きようは、お湯をわかしますから、床屋へいつておいでなさい。」とおつしやいました。勇ちゃんは、床屋へゆくのがきらいでした。それで、いつもおとなしくいったことがなかったのですが、

「僕のお友だちのうちの、床屋へいつでもいいでしょう。」とたずねました。

お母^{かあ}さんは、床屋^{とこや}へゆくのがいやなものだから、また、なにかいいがかりをつけるのだ
お^{おも}も思いましたので、

「いつもの床屋とこやへおいでなさい。そのお友だちの家うちというのはどこですか。」とおつしやいました。

「^{とお}遠いところで、^{ちい}小さな^{とこや}床屋なんです。」

そばで、この話をきいていたお姉さんねえが、

「汚い床屋へいつて、病氣でもうつるといけないから、いつもの床屋へいったほうがいいでしょう。」といわれました。

けれども、勇ちゃんゆうちゃんは木田きだのうちのことを考えると、自分じぶんは、どうしてもあそこへゆかなければならぬような気がきしました。

「僕は、ほかで頭を刈って遊びにゆくと、なんだか気がすまんのだもの。」といいました。

「ほんとうに、そうお考えなら、お友だちのお父さんに、刈つておもらいなさい。」と、おっしゃったのです。

そんなことがあって、以後^{いご}勇^{ゆう}ちゃんは、ずっと木^き田^だくんのところへいって、髪^{かみ}を刈^かつてもらいました。そして、お父^{とう}さんとも仲^{なか}よしになりました。

ところが、突^{とつ}然^{ぜん}のことでした。木^き田^だが学^が校^{っこう}で、

「勇^{ゆう}ちゃん、僕^{ぼく}のうち急^{きゅう}に引^ひつ越^こすので転^{てん}校^{こう}しなければならんだよ。だから、きょう遊^{あそ}びにおいでよ。」といいました。

「どこへ引^ひつ越^こしするの？」

「遠^{とお}い、浅^{あさ}草^{くさ}の方^{ほう}なんだ。」

その日^ひ、勇^{ゆう}ちゃんは、学^が校^{っこう}から帰^{かえ}ると遊^{あそ}びにいきました。

すると、もう店^{みせ}には道^{どう}具^ぐがなかったのです。

「このすいれんをあげよう。クリーム色^{いろ}の花^{はな}が咲^さくんだぜ。」と、木^き田^だが裏^{うら}から持^もつてきました。

「坊^ぼちゃん、よく頭^{あたま}を刈^かりにきてくださいましたね。勉^{べん}強^{きやう}してえらい人^{ひと}におなりなさいよ。」と、お父^{とう}さんがいいました。

ちょうど一年^{ねん}たって、そのすいれんの花^{はな}が咲^さいたのです。けれど、木^き田^だくんからは、一度^どもたよりがありません。勇^{ゆう}ちゃんは花^{はな}をながめながら、友^{とも}だちとお父^{とう}さんの無^ぶ事^じを祈^{いの}つ

た
の
で
あ
り
ま
し
た
。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「すいれんは咲《さ》いたが」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すいれんは咲いたが

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>